

K. マンスフィールドの「船の旅」小論 — 情景描写とフェネラの内面世界 —

腹部 千代子

On K. Mansfield's "The Voyage"

FUKUBE, Chiyoko

要旨

キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) の「船の旅」("The Voyage") は、1921年8月11日に書き始められ、同14日に完成された短篇作品である。この作品は、船出前のウェリントンの旧棧橋の場面、船中での場面、旅が終わってピクトンに到着した場面の三つの場面から構成されている。そして、それらの場面を時間的に見ると、巨大な闇に包まれた旧棧橋の場面は暗黒の夜の世界、船が夜明けにピクトンに到着した第三の場面は夜明けの世界を示し、第二の場面はその間の橋渡しの役割を果たしていることになり、夜の世界と夜明けの世界のはざまを示す。本稿では、物語の筋を追いながら、原文を引用して、三つのそれぞれの場面の情景描写と主人公の少女フェネラの内面世界に焦点を当てて、考察した。

第一の場面は、暗闇が支配し、すべてが暗黒の塊で彫って作られたように見える。そのような闇の中を人々が急ぎ足で船に向かっていく。その情景は切迫感や緊迫感を表すとともに、母を亡くしたフェネラの内面の大きな不安を象徴している。第二の場面では、船室に入った後、フェネラはまるで小さな箱の中に祖母と一緒に閉じ込められたように感じるが、祖母は、きびきびとした様子で寝支度を始め、船旅に慣れないフェネラにいろいろと指図を与え、また安心感をも与える。第三の場面では、夜明けに船がピクトンに到着し、フェネラは祖父母の家で祖父に対面する。"small" や "white" という語が頻繁に使われているところから、フェネラにとっては恐怖感のない、安心して過ごせる安全な世界を表していると考えられる。こうして、船の旅は、フェネラを暗黒の世界から連れ去り、夜明けの世界へと導いていくのである。夜明けの世界で物語が閉じるというその構成はまた、母を亡くし、不安な気持ちでいっぱいであったフェネラが、祖母との旅によって父方の祖父母の元に導かれて、これから先彼らの庇護の元で安心して過ごすことができるだろうという希望を抱かせる。

I. はじめに

キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) の「船の旅」("The Voyage") は、1921年8月11日に "Going to Stay with Granma"[sic] というタイトルで書き始められたことが *Notebook* に記載されている^(註1)。これは "The Voyage" とタイトルを変えて、同14日に完成されているが^(註2)、7月末から書き始め、9月10日に完成した「入り江のほとり」("At the Bay") を中断して書いたとアルパーズ (Antony Alpers) の伝記には書かれている^(註3)。その後、同年12月24日に、この作品は『スフィア』誌に発表された^(註4)。1921年後半の6ヵ月間は、マンスフィールドにとって、創作意欲に溢れていた時期であり、作家として最も充実していた時期とされている。マンスフィールドは、1918年の2月に発症した肺結核の治療のためにイギリスを離れ、転地療養を繰り返していたため、夫のマリ (John Middleton Murry, 1889-1957) とは別居していることが多かった。しかし、1921年6月から翌年1月までは、マリがスイスで療養中のマンスフィールドに合流して、モンタナ・シュル・シエール (Montana-sur-Sierre) の地にあるサパン荘 (Chalet des Sapins) を借りて二人で一緒に過ごした時期であり、結婚生活

の第二の安定期であったと言われている。「入り江のほとり」、「園遊会」("The Garden-Party")、「人形の家」("The Doll's House") 等の傑作が書かれたのもこの時期であるが、「船の旅」も含めてこれらはニュージーランドを舞台としているため、「ニュージーランドもの」と呼ばれている。1908年にニュージーランドを離れて渡英した後、マンスフィールドは二度と故郷に帰ることはなかったが、ニュージーランドを舞台にした作品群には、ニュージーランドに住む家族たちや知人たちをモデルとした人物たち、およびニュージーランドにあるマンスフィールドに縁のある場所等が登場してくる。

マンスフィールドは、「船の旅」について、1922年3月11日に、友人の作家ガラーディ (William Gerhardt, 1895-1977) に宛てて、次のような手紙を書いている。

But when I wrote that little story I felt that I was on that very boat, going down those stairs, smelling the smell of the saloon. And when the stewardess came in and said, 'We're rather empty, we may pitch a little.' I can't believe that my sofa did not pitch. And one moment I had a little bun of silk-

white hair and a bonnet and the next I was Fenella hugging the swan neck umbrella. It was so vivid – terribly vivid – especially as they drove away and heard the sea as slowly it turned on the beach. Why – I don't know. It wasn't a memory of a real experience. It was a kind of *possession*. I might have remained the grandma for ever after if the wind had changed that moment. And that would have been a little bit embarrassing for Middleton Murry... But don't you feel that when you write? I think one always feels it. (イタリック体は原文のまま)^(注5)

この文面から、「船の旅」を執筆していた時のマンスフィールドは、自分も船の中にいたように感じたり、祖母になったように感じたり、白鳥の首がついた祖母の傘を抱きかかえているフェネラになったように感じたりしたということがわかる。執筆中は、日常生活の中でも作品世界から離れられず、いかにのめり込んでいたか、作家魂の一端が窺える。

さて、作品の概要は以下のとおりである。主人公は、母を亡くしたばかりの少女フェネラ (Fenella) である。彼女と祖母はある夜、ピクトン (Picton) 行きの汽船に乗るために、見送りの父に伴われてウェリントン (Wellington) の旧棧橋を歩いていく。旧棧橋の上はとても暗く、羊毛置き場や家畜運搬車、高くそびえているクレーン車、小さなずんぐりした鉄道の機関車といったすべての物が固い暗闇から彫り抜かれたように見える。そして、それらはまるで巨大な黒いキノコの茎のように見えた。ランタンがぶら下がっていて、その灯りは臆病な震える光を暗闇に広げることを恐れているかのように静かに燃えている。第二の汽笛が鳴り響くと、見送りに来ていた父はフェネラの手で「何か必要な時のために」と一シリングのお金を押し込んで船を降りて行く。彼女の心の中に、「これからいつまで祖母の家で過ごさなければならないのだろうか」という不安が募ってくる。黒いロープの大きな輪が空中に飛んで棧橋に落ちると、船は沖の方へ向ってゆっくと進みだす。父の姿を捜しつつ、陸の方を見つめるフェネラの目に見えるのは、二つ、三つの灯りと町の大時計の文字盤、もはや小さな点のようになった丘の上のいくつかの灯りだけであった。祖母のところに戻り、箱の中に閉じ込められたような小さな船室に入ると、祖母の顔見知りの船室係の女性が話しかけてくる。翌朝、甲板に出ると、氷のように冷たく、陽はまだ昇っていなかったが、光が薄れて冷たく青白い空は冷たく青白い海と同じ色で、陸地には白い霧が動き、黒い森の影がはっきりと見えてくる。浮き棧橋が近づいてきてロープが空中を飛んできて甲板に落ちる。緩やかに岸辺を打つ海は、眠っているかのような響きを立てている。人影も見えないし、煙さえ見られなかった。出迎えの馬車に乗り、祖母の家に着く。門に手をかけると震えているような朝露の

玉が手袋の先を濡らして染み込み、石竹の芳しい香りが寒い朝の中に溶け込んでくる。フェネラが祖母に促されて祖父の寝ている部屋に入っていくと、大きなベッドに寝ていた祖父が、年老いた鳥が大きく目を開けているかのように、やってきたフェネラに優しく声をかけてくる。物語はここで閉じる。

ピクトンは、ニュージーランドの南島最北部に位置する小さな港町であり、南北島間のクック海峡 (Cook Strait) を渡るフェリーが発着する海上交通の要所になっている。一帯は、マールボロ海洋公園 (Marlborough Sounds Maritime Park) に指定されており、数多くの入り江や島々が点在する美しい海岸線を持つ。ピクトンの町は、それらの入り江の一つ、クイーン・シャーロット・サウンド (Queen Charlotte Sound) の奥に位置している^(注6)。

ピクトンには、実際、マンスフィールドの父方の祖父母が住んでいた。また親戚も南島に住んでいたために、マンスフィールド自身は何度もピクトンを訪れていたとのことである。初めてピクトンに連れて行かれたのは、1889年のことであり、その時彼女はまだ6ヶ月足らずであった。「船の旅」の最後の頃に、祖父が祖母に対して、“Is that you, Mary?” (「メアリー、お前かい?」) と呼びかけているところから、この作品に登場する祖母は、マンスフィールドの父方の祖母であるメアリー・ビーチャム (Mary Beauchamp) をモデルにしていると推測できる^(注7)。ただし、作品中の祖父の名前は実名の Arthur ではなく、Walter となっている。

「船の旅」は、その内容から、船出前のウェリントンの旧棧橋の場面、船中での場面、旅が終わってピクトンに到着した場面の三つに分けることができる。そして、第一の場面は暗黒の夜の世界、第三の場面は夜明けが象徴する明の世界を示し、第二の場面はその間の橋渡しの役割を果たしていると考えられる。本稿では、物語の筋を追いながら、原文を引用して、三つのそれぞれの場面の情景描写とフェネラの内面世界に焦点を当てて考察していくことにする。

II. 暗黒の世界

まず、船出前のウェリントンの旧棧橋の情景から見ていきたい。フェネラ、父親、そして祖母の三人は馬車から降りて、旧棧橋を歩いて行く。フェネラと祖母はこれからピクトン行きの船に乗ることになっている。

It was dark on the Old Wharf, very dark; the wool sheds, the cattle trucks, the cranes standing up so high, the little squat railway engine, all seemed carved out of solid darkness. Here and there on a rounded wood-pile, that was like the stalk of a huge black mushroom, there hung a lantern, but it seemed afraid to unfurl its timid, quivering light in all that

blackness; it burned softly, as if for itself. (p. 321)

作品冒頭から暗い。“dark”, “darkness”, “black”, “blackness”という暗闇や暗黒を表す語が頻繁に出てくる。暗闇を背景にしなが、羊毛置き場、牛を乗せた無蓋貨車、非常に高くそびえているクレーン車、小さなずんぐりした機関車、それらすべての物が固い暗黒の塊で彫って作ってあるように思われる。そこここにある材木を積み重ねた丸い山の上に、それらは巨大な黒いキノコの茎のようにそびえているかのようだ。ランタンの灯りがあっても、暗黒の中でおどおどと震え、静かに燃えているにすぎない。作品の冒頭を支配するこの暗闇は、まるで人間を飲み込んでしまうかと思われるほど恐ろしいもののように描かれ、まさにフェネラが直面している現在の苦境を象徴している。「巨大な黒いキノコの茎」という表現も、幼い彼女に与える闇の圧迫感、今後の生活に対する大いなる不安を表していると言えよう。また、おどおどとした震えるランタンの灯りは心細さを感じているフェネラの内面世界と重ねられる。

Fenella's father pushed on with quick, nervous strides. Beside him her grandma bustled along in her crackling black ulster; they went so fast that she had now and again to give an undignified little skip to keep up with them. As well as her luggage strapped into a neat sausage, Fenella carried clasped to her her grandma's umbrella, and the handle, which was a swan's head, kept giving her shoulder a sharp little peck as if it too wanted her to hurry.... Men, their caps pulled down, their collars turned up, swung by; a few women all muffled scurried along; and one tiny boy, only his little black arms and legs showing out of a white woolly shawl, was jerked along angrily between his father and mother; he looked like a baby fly that had fallen into the cream. (pp. 321-322)

棧橋をのんびりと歩く者は誰もいない。フェネラの父親は神経質そうに大またで速く歩いて行く。黒いアルスター外套がバリバリと音を立てて、祖母は急ぎ足で歩いて行く。大人の二人は非常に速く歩いて行くので、フェネラはなかなか追いつけない。見苦しいけれども、時々小走りに駆けなければならない。フェネラの持つ祖母の傘の柄の白鳥の首までがフェネラを急かすように彼女の背中を鋭く突つづく。彼ら以外の他の大人の男たちも女たちも皆急ぎ足でさっさと歩いて行く。しかし、フェネラと同様に小さな男の子は速く歩かず、両親の間でぐいぐいと手を引っ張られていく。その様子は、まるでクリームの中に落ちてしまって必死に這い上がろうとしている蠅の子どものようにも見える。大人たちとは違って子どもたちはどこへ行くのか、どこに連れて行かれるのかもわからず、ただ急いでいる大

人たちの意のままにどこかに引っ張られて行く様子である。この場面では、特に、“quick”, “nervous”, “fast”, “a sharp little peck”, “skip”, “crackling”, “pushed”, “bustled”, “hurry”, “swung”, “scurried”, “was jerked”という語や語句が、人が急いでいる様子、あるいは急かされている様子を表し、その場に漂う切迫感、緊迫感を表現している。

船に向かって歩いて行く彼らの耳に、突然汽笛の音が響く。あまりにも突然であったので、フェネラも祖母も飛び上がってしまうほどである。父だけが落ち着き払っているように、「最初の汽笛ですよ」と簡潔に言う。三人が船に乗り込んだ後、フェネラと祖母が見送りに来た父といよいよ別れなければならない時が来る。父の声は厳しく硬い感じがするが、フェネラが熱心に見つめると、彼は疲れて悲しげに見えることがわかる。二度目の汽笛までが“a voice like a cry” (p. 322) (泣き叫んでいるような声) のように聞こえてくる。フェネラは「お父さんよろしく言って下さい」と祖母に対して父親の唇が言うのを目にする。“You'll give my love to father, Fenella saw her father's lips say” (p. 322) という表現から、父の声が彼女にははっきりと聞こえていないことがわかる。祖母の方は、心が大変動揺している。やがて、父が祖母に向かって、“God bless you, mother!” (p. 323) と言うが、“she heard him say” (p. 322) と表現されているので、父の声は今度はフェネラの耳にしっかりと届いているようだ。

祖母はすすり泣きながら父に別れを告げる。その情景はフェネラにとって見るに耐え難く、素早く背を向けて、一、二度喉をごくりとさせて、船のマストの上の小さな緑の星を見て、ひどく眉をしかめる。そうして、涙をこらえていると、父が「さようなら、フェネラ。いい子にしているんだよ」とフェネラに言う。これからどれくらいの間祖母のところにいなければならないのかと不安そうに訊いても、父は彼女の顔を見ようとせず、ただ「そのことについては何とか考えておくよ」と言うだけだ。そして、「何か必要な時のために」と、彼女に一シリングをくれる。

A shilling! She must be going away for ever! “Father!” cried Fenella. But he was gone. He was the last off the ship. The sailors put their shoulders to the gangway. A huge coil of dark rope went flying through the air and fell “thump” on the wharf. A bell rang; a whistle shrilled. Silently the dark wharf began to slip, to slide, to edge away from them. Now there was a rush of water between. Fenella strained to see with all her might. “Was that father turning round?” — or waving? — or standing alone? — or walking off by himself? The strip of water grew broader, darker. Now the Picton boat began to swing round steady, pointing out to sea. It was

no good looking any longer. There was nothing to be seen but a few lights, the face of the town clock hanging in the air, and more lights, little patches of them, on the dark hills. (p. 323)

彼女にとって一シリングほどの大金をもらうとなると、「もう永久に帰れないに違いないのではないか」と考えてしまう。とうとう父も船を降りて行き、船が棧橋を出て行く。黒いローブの大きな輪が空中を飛び、棧橋の上にドサリと落ちる。ベルが鳴り、汽笛がかん高い音を出す。静かに棧橋が動き、滑り始め、じりじりと離れて行く。間の水は激しく動く。フェネラは父の姿を求めて全力を振り絞って岸の様子を見張っている。細長い水の面はだんだん広がっていき、陸の光が遠くに消えて辺りが闇に包まれていく。ピクトン行きの船は沖の方を目指して、着実に向きを変え始める。町の方を見ていてももう暗すぎて、二、三の灯り、空に浮かんでいる町の時計塔の文字盤、暗い丘の上にあちこち小さく固まっているさらにいくつかの灯り以外には何も見えない。ピクトン行きの船が向きを変えたことは、また、フェネラの人生が方向転換したことを象徴している。

III. 暗黒の世界と夜明けの世界のはざま

船の旅が始まり、船室でのフェネラと祖母の様子が描かれる。フェネラが祖母のところに戻ると、祖母はもう悲しんでいるようには見えず、顔には熱心な明るい様子が見られた。そのことはフェネラをほっとさせる。祖母はフェネラを連れて船室を見に行く。彼女は、“Keep close to me, and mind you don't slip.” (p. 324)、さらに、“And be careful the umbrella isn't caught in the stair rail. I saw a beautiful umbrella broken in half like that on my way over.” (p. 324) と、フェネラに、傘を階段の手擦りに引っ掛けて折らないようにと注意を促す。この白鳥の首のついた傘が祖母からフェネラに預けられたことから、フェネラはこれを大切に持ち運ぶという重要な役目を与えられたことがわかり、作品の中で何度もこの傘が言及されるのも納得がいく。祖母からは父との別れ際に見せた動揺した様子がすっかり消え、いつものしっかり者の祖母に戻ったようだ。

二人が船室に入ると、青い制服を着た女性の船室係がやってくる。彼女と祖母との会話から、彼女はすでに祖母とは顔なじみであることがわかる。そのことから、祖母はピクトンとウェリントンで船で何度か行き来しているということが推察される。さらに、フェネラの母はおそらくずっと病に臥せていて、祖母が看病のためにウェリントンに来ていたのではないかと、また、フェネラの母は病死したのではないかとということが察せられる。

“I hope — ” began the stewardess. Then she turned round and took a long, mournful look at grandma's blackness

and at Fenella's black coat and skirt, black blouse, and hat with a crape rose.

Grandma nodded. “It was God's will,” said she.

The stewardess shut her lips and, taking a deep breath, she seemed to expand.

“What I always say is,” she said, as though it was her own discovery, “sooner or later each of us has to go, and that's a certingty.” She paused. (p. 325)

船室係は祖母とフェネラの服装からフェネラの母が亡くなったことを知る。祖母はもはや動揺することもなく、船室係と話をする。「神様の思し召しです」という言葉からも、祖母はもうすでにフェネラの母の死を穏やかに受け止めていることがわかる。実は、この作品の冒頭からここまでのところで、フェネラの母が亡くなったということは一言も書かれていないのである。船が出る前の緊迫した状況、父との別れといったことから、読み手はこの家族に何かが起こったのだということを察するのみであるが、ここで船室係と祖母の会話から、そして、フェネラと祖母の服装からやっとなら、フェネラの母が亡くなったのではないかとことを確信することになるだろう。そして、作品の冒頭から7ページ目のところにある“Poor little motherless mite” (p. 327) という船室係の言葉によって、フェネラが母を亡くしたことが明かされることになる。さらにまた、祖母はこれまで何度もこの船を利用していても船室に泊まるということをしていないということ、今回はフェネラの父が二人のために特別に配慮して船室を予約したのだということ (“But this time my dear son's thoughtfulness —” (p. 325)) も読者に明らかにされる。

船室はとても小さく、フェネラには、祖母と一緒に箱の中に閉じ込められてしまったかのように感じられる。彼女は勝手がわからず、手荷物と傘を持ったまま、ドアにもたれて立ったまままでいる。そして、こんな狭い場所で洋服を脱がなければならないのかと考えている。すると、祖母はすでに頭からボンネットを取って、帽子掛けに掛けている。祖母が帽子をかぶらない姿をほとんど見たことのないフェネラには祖母が見知らぬ人のように見えてくる。祖母は荷物の紐をほどいて、スカーフを取り出し、頭のまわりに巻く。そして、胴着を脱ぎ、次々に着ている物を脱いでいく。フェネラも祖母にならって、上着やスカートやスカーフを脱ぎ終わり、フランネルの化粧着を着る頃までには、祖母はすっかり寝る用意ができています。

Then she undid her bodice, and something under that, and something else underneath that. Then there seemed a short, sharp tussle, and grandma flushed faintly. Snip! Snap! She had undone her stays. She breathed a sigh of relief and,

sitting on the plush couch, she slowly and carefully pulled off her elastic-sided boots and stood them side by side.

By the time Fenella had taken off her coat and skirt and put on her flannel dressing-gown grandma was quite ready. (p. 326)

上記の引用の中で、“something under that”, “something else underneath that”と、畳みかけるように“something”, “under”, “that”が続く部分、また、“a short, sharp tussle”, “flushed faintly”, “Snip! Snap!”といった頭韻の連続、“slowly and carefully”の箇所“and”を挟んだ副詞の連続によって“-ly”が連続されること、“had taken off her coat and skirt and put on”の箇所“and”の連続によって、リズム感が生まれ、調子よく滑らかに文章が進む。このように、同語や同音の連続によって、祖母がいかに手馴れた様子で衣服を脱ぎ、寝る準備をしていくということが効果的に表現されている。祖母はまた二段になった寝台の上段に軽々と上がって行って、フェネラを驚かせる。

手際よく寝る準備を整えていく祖母とは異なり、フェネラには、身内を亡くしたことも、父と別れて生活することも、船室に泊まることも、すべてが初めての経験である。フェネラの方は旅慣れず、何をしたらよいのかわからず、祖母のすることを見ながら真似ていく。

The hard square of brown soap would not lather and the water in the bottle was like a kind of blue jelly. How hard it was, too, to turn down those stiff sheets; you simply had to tear your way in. If everything had been different, Fenella might have got the giggles. . . . At last she was inside, and while she lay there panting, there sounded from above a long, soft whispering, as though someone was gently, gently rustling among tissue paper to find something. It was grandma saying her prayers. . . . (p. 327)

前にも述べたが、フェネラは小さな箱のような船室に閉じ込められたような気がしているが、その中では日常的なことであってもいつもとはまったく違った感じがする。茶色の硬く四角い石鹸は泡立ちにくく、ビンの中の水は青いゼリーのようだ。硬いシーツをめくるのもやりにくい。無理にもぐり込まなければならぬ。事情が違っていれば、もしかしたらフェネラはくすくすと笑い出すところであったろうが、そうはいかない。寝台の上の段からは祖母がお祈りをしている静かなささやき声が聞こえてくるが、その声はまるで誰かが何かを見つけようとして薄葉紙の中を静かにまさぐっているかのような音に聞こえる。聞き慣れているはずの祖母のお祈りの声もまるで違ったように

聞こえてくる。本当に、何もかもがいつもとは異なる様子を見せている。しかし、慣れた様子でてきばきと寝る準備をする祖母は、フェネラにとっては実に心強い存在となっていたことだろう。

いよいよ船がピクトンの港に近づいてきた頃、フェネラが目を見つめると、彼女の頭上の空中で何かが揺れているのを目にする。

What was it? What could it be? It was a small grey foot. Now another joined it. They seemed to be feeling about for something; there came a sigh.

“I’m awake, grandma,” said Fenella.

“Oh, dear, am I near the ladder?” asked grandma. “I thought it was this end.”

“No, grandma, it’s the other. I’ll put your foot on it. Are we there?” asked Fenella. (p. 328)

“What was it?”と“What could it be?”は、自分の目の前で揺れている物が何なのかわからないフェネラの不安を表しているようだ。目が慣れてくると、それは上の段に寝ている祖母の足であり、祖母が寝台から降りようとして足で梯子を探していることがわかってくる。フェネラは宙ぶらりんになった祖母の足を梯子のところに導いてあげようとする。ここでは祖母を手助けしてあげようとするフェネラの様子が窺える。

寝台から飛び起きたフェネラが丸い船窓をのぞくと、陸が視界に入ってくる。彼女は、祖母に陸が見えてきたことを告げる。

“It’s land, grandma,” said Fenella, wonderingly, as though they had been at sea for weeks together. She hugged herself; she stood on one leg and rubbed it with the toes of the other foot; she was trembling. Oh, it had all been so sad lately. Was it going to change? But all her grandma said was, “Make haste, child. I should leave your nice banana for the stewardess as you haven’t eaten it.” And Fenella put on her black clothes again and a button sprang off one of her gloves and rolled to where she couldn’t reach it. They went up on deck. (p. 328)

彼女たちの船は午後11時にウェリントンの岸を離れ、夜明け頃にピクトンに到着するので、彼女たちが船の中にいたのはごく数時間ほどであったろう。しかし、フェネラには何週間も船に乗っていたかのように感じられる。“Oh, it had all been so sad lately.”という文からは、前夜とは違ってフェネラに少し余裕が出てきて、自分の置かれた状況が客観視できてきているようにも感じ取れる。そして、これからは状況が変わるだろう

かと考える (Was it going to change?). しかし、祖母は非常に現実的で、「急ぎなさい。食べていなかったからバナナは船室係の人にあげましょう」とフェネラに言う。フェネラの片方の手袋からボタンがはじけて飛んでいき、彼女の手の届かないところに転がっていく。そのボタンは、これからどういう人生を送っていくのかまったくわからないフェネラの状況を象徴しているかのようだ。

船室も寒かったが、甲板はもっと寒く、氷のようだった。太陽はまだ昇っていなかったけれども、星の光は薄れて、冷たく青白い空は冷たく青白い海と同じ色をしていた。陸上には白い霧が上下に動いていた。また、黒い茂みや奇妙な銀色のしおれた木ははっきりと見る事ができた。やがて、浮き棧橋、箱の蓋にくっついている貝のように固まっている青白い小さな家々も見えてくる。一日の始まり、新しい人生の始まりを予期させる夜明けの世界が彼らを出迎えるのである。

IV. 夜明けの世界

いよいよ船が陸に近づくと、浮き棧橋が船の方へ迎えに出てくる。ロープの輪を持っている男や、首をうな垂れている小さな馬が引く馬車や、馬車のステップに腰を下ろしている男も船の方にやって来る。その男は祖母とフェネラを迎えに来たペンレディ氏 (Mr. Penreddy) であることがわかり、祖母は喜んでいるようだった。フェネラは祖母の後について棧橋を降り、ペンレディ氏の小さな馬車に乗り込み、祖父の待つ家に向かう。

The hooves of the little horse drummed over the wooden piles, then sank softly into the sandy road. Not a soul was to be seen; there was not even a feather of smoke. The mist rose and fell and the sea still sounded asleep as slowly it turned on the beach. (p. 329)

彼らが降り立ったピクトンの陸地は早朝であるためか、まだ人の姿も家々の煙突から出てくる煙さえも見えない。海さえもまだ眠っているように見える。すべてがまだ目覚めていず、静けさに包まれている。上の引用の中には、“sank”, “softly”, “sandy”, “soul”, “seen”, “smoke”, “sea”, “still”, “sounded”, “slowly”と[s]の子音で始まる語が数多く使われている。[s]の音は静かで穏やかな音感覚を持っているから、すべてが静けさに包まれている様子がまさに言語によっても裏打ちされている。

ついに、小さな馬に引かれた小さな馬車が祖父の待つ家に到着する。その家は“one of the shell-like houses”と表現されている。

Fenella put her hand on the gate, and the big, trembling dew-drops soaked through her glove-tips. Up a little path

of round white pebbles they went, with drenched sleeping flowers on either side. Grandma's delicate white picotees were so heavy with dew that they were fallen, but their sweet smell was part of the cold morning. The blinds were down in the little house; they mounted the steps on to the veranda. (p. 329)

この引用の中では、“little”や“white”という語が目立つ。また、この部分以外のところでも、“the little cart” (p. 329) や “the little horse” (p. 329) のように“little”が頻繁に使われている。そして、フェネラが通された居間は、“a small dusky sitting-room”と描かれているが、“small”は上の“little”と同義語である。“little”や“white”と形容された世界はおそらくフェネラに安心感を与えたであろう。作品の冒頭ではウェリントンの旧棧橋が巨大な暗闇に包まれていたが、それに対して、“little”や“small”と形容された世界はフェネラの身の丈に合った世界であり、さらに“white”は暗闇と喪からの解放を表す。また、祖母はフェネラを居間にそっと (“gently”) 押していくが、その副詞からもフェネラに対する優しさを感じ取れる。巨大な闇に包まれた不安な世界から、優しさに包まれた安心できる世界にフェネラが導かれてきたことがわかる。

祖母が祖父に“Walter!”と声をかけると、即座に“Is that you, Mary?” (“メアリー、お前かい?”) (p. 329) と応える祖父の「半ばこもったように響く深い声」 (“a deep voice that sounded half stifled”, p. 329) が聞こえてくる。フェネラは祖父の姿を見る前に、祖父の声を聞くのである。祖父と祖母はお互いの姿を見ないうちから互いに声をかけ合う。この二人の声のかけ合いもまたおそらくフェネラに安心感を与えたのではないだろうか。さらに、その居間の中は次のように描写されている。

On the table a white cat, that had been folded up like a camel, rose, stretched itself, yawned, and then sprang on to the tips of its toes. Fenella buried one cold little hand in the white, warm fur, and smiled timidly while she stroked and listened to grandma's gentle voice and the rolling tones of grandpa. (p. 330)

ここでもまた、“white”と“little”という形容詞が多く使われている。また、p. 329の引用にも出てくる“cold”が再び顔を出す。この場面では、フェネラが冷たくなった片方の手を白い猫の温かい毛並みの中に埋めて、毛をなでながら、祖母の「優しい声」 (“gentle voice”) と祖父の「よく響く声」 (“the rolling tones”) を聞きながら、遠慮がちに微笑んでいる。祖父母たちの声は、彼らがこれからフェネラを優しく包んでくれるのではないかと期待を持たせる。

祖母に促されてフェネラは祖父の寝ている部屋に入る。

There, lying to one side of an immense bed, lay grandpa. Just his head with a white tuft and his rosy face and long silver beard showed over the quilt. He was like a very old, wide-awake bird. (p. 330)

祖父はとても年老いた、すっかり目を覚ました鳥のようだったが、ここでも“white”という形容詞が使われている。そして、フェネラが祖父にキスをすると、彼女は祖父に、“Her little nose is as cold as a button.”と言われてしまう。船の中でフェネラの手袋についていたボタンがはじけて飛んでいき彼女の手の届かないところに転がって行ってしまったという場面があったが、上記の祖父の言葉からは、行方知れずになっていたボタンがまるで祖父に拾われてフェネラの元に戻って来たかのように感じられる。フェネラは再び微笑み、祖父のベッドの手擦りに白鳥の首のついた祖母の傘を掛ける。祖父は、“his white tuft”をくしゃくしゃにして、フェネラをととても愉快そうに見つめたので、彼女は彼が自分にウインクしたのだと思うほどであった。祖父のベッドが“an immense bed”（大きなベッド）と表現されているが、この言葉からは祖父の包容力がイメージされる。

V. 終わりに

「船の旅」の作品を、船出前のウェリントンの旧栈橋の情景、船中、そして、旅が終わってピクトンの祖父母の家に到着した場面の三つに分けてそれぞれの情景とフェネラの内面世界を考察してきた。

船の旅が始まる前のウェリントンの旧栈橋は、暗闇が支配し、すべてが暗黒の塊で彫って作られたように見える。ランタンがぶら下がっていても、おどおどした震える光を広げるのを恐れているかのように思われ、そのような闇の中を人々が急ぎ足で船に向かっていく。その情景は切迫感や緊迫感を表すとともに、母を亡くしたフェネラの内面の大きな不安を象徴している。フェネラの父との別れの場面では、祖母でさえもすすり泣き、フェネラは自分の今後の人生に対してなおい層心細く感じる。そして、いよいよ船が向きを変えて、ピクトンに向けて出帆すると、父の姿も町の情景もすべて暗闇の中に包み込まれるように消えていく。

船が港を出た後に祖母のところに戻ったフェネラは、祖母が落ち着きを取り戻したのを見て安心する。船室に入った後、フェネラはまるで小さな箱の中に祖母と一緒に閉じ込められたように感じるが、祖母は、きびきびとした様子で寝支度を始め、船旅に慣れないフェネラにいろいろと指図を与え、また安心感をも与える。

やがて、船がピクトンに到着すると、夜が明け始め、空も海も青白い色を呈している。陸上には白い霧が高く、低くたなびき、青白く小さな家々は箱の蓋にくっついているような貝のように固まって見える。船出前の、大きな暗黒の世界から、一転して、フェネラたちは薄明かりの世界、明の世界に入っていく。“small”や“white”という語が頻繁に使われているところからも、フェネラにとって恐怖感のない、安心して過ごせる安全な世界を表していると考えられよう。祖父の家に到着したフェネラには初めて微笑が戻り、彼に会ったフェネラは、彼が自分にウインクをしたのだと思うほどである。船の旅は、フェネラを暗黒の世界から連れ去り、明の世界へと導いていったのである。そして、その旅は、また、母を亡くし、父と二人だけになってしまったフェネラを、父方の祖父母の元へと導き、彼らの庇護の元で安心して過ごすことができるだろうという希望を抱かせて、物語が閉じる。

旅の間中、フェネラは祖母に頼まれて、ずっと白鳥の首のついた祖母の傘を守り続け、無事に祖父のベッドの手擦りに立ってかけて、その役割をきちんと果たす。「非常に年老いて、すっかり目を覚ました鳥のようだ」と描写された祖父が鳥のイメージで捉えられるのであれば、祖父の横たわる大きなベッドは鳥の巣と見なされ、祖母の傘についた白鳥は、親鳥の待つ巣に戻ってきたことになる。フェネラはずっと祖母の傘を守り続けていたのであるが、そのことはまた、フェネラが祖父の分身にずっと守られていたと考えることも可能であり、結局のところ、フェネラは旅の間もずっと祖母だけではなく、祖父にも守られていたと見なすこともできるだろう。彼らの名字が“Crane”(鶴)であることも鳥のイメージと強い結びつきがあることがわかる。意味は異なるが冒頭にも“crane”(起重機)という語が出ている。

「船の旅」の作品の中での中心核となるのは、特に船室の中でのフェネラと祖母との、守られる者と守る者との関係である。父との別れの際には涙を見せ、動揺した祖母であったが、船が出帆した後の船室の中では、もはや涙を見せることはない。フェネラをしっかりと守ろうとする気丈さを持ち、狭い箱のような船室の中で戸惑っているフェネラを元気づける。船旅と言っても一晩だけの、おそらく数時間足らずの短い旅である。が、この短い時間の中でフェネラと祖母はなおいっそう心の結びつきを強くしたのではないだろうか。

この船中での場面は、ウェリントンの暗黒の世界からピクトンの明の世界への橋渡しの役割を果たす。船に乗り、海を渡って一つの陸からもう一つの陸へと移動する中で、祖母がフェネラの不安を和らげ、新しい世界に向かう心の準備をさせるのである。

作品の冒頭の第一文、“The Picton boat was due to leave at half-past eleven.”は、時間に支配される人間世界、あるいは、人間の感情にはおかまいなしに情け容赦なく進んでいく

現実世界を象徴している。一方、作品の最後の頃に出てくる、祖父のベッドの上に掛けられた黒い額縁の中の格言, “Lost! One Golden Hour / Set with Sixty Diamond Minutes. / No Reward Is Offered / For It Is Gone For Ever!” (p. 330) (失われたり！かけがえのない黄金の一時間 / 60のダイヤモンドが1分ごとに散りばめられている / どんな謝礼も与えられない / 1時間という遺失物は永久に所有者の元に戻ってはこないのだから) は、時間の大切さを教えている。「時間はどんどん過ぎていき、決して戻ってくることはない。一分一秒でも無駄にしてはいけないのだ」という祖母の大切な教えである。主人公のフェネラは母を亡くし、父と別れて、これからはしばらくの間祖父母と暮らさなければならない。予期せぬ不幸が襲ってきたわけだが、それでも、時間は人間の状況にかかわらず否応なしにどんどん過ぎていく。自分の置かれた苦境に負けることなく、前向きにしっかりと生きていくことが大切なのだというところを、この祖母の格言は教えているのではないだろうか。巨大な暗闇の世界の描写から始まるこの作品は、主人公の少女フェネラが祖母との船の旅によって、祖父母の住む優しさに包まれた世界に導かれてきたところで閉じられる。それはまさに明るい未来へと歩き始めたフェネラの新しい人生を象徴するものだろう。

注

引用作品のテキストには、*Collected Short Stories of Katherine Mansfield* (London: Constable, 1945) を使用した。本文引用はすべてこれからであり、頁数は引用に続けて括弧内に示した。

- 1) Katherine Mansfield, *The Katherine Mansfield Notebooks II*, ed. by Margaret Scott (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1997), p. 273. 以下のような記述がある: “I don’t know how I may write this next story. It’s so difficult. But I suppose I shall. The trouble is I am so infernally cold.” この中の“this next story”は、“The Voyage”の作品のことである。
- 2) Julie Kennedy, *Katherine Mansfield in Picton* (Auckland: Cape Catley Ltd., 2000), p. 30.
- 3) Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (Oxford: Oxford University Press, 1980), p. 339.
- 4) Katherine Mansfield, *The Collected Letters of Katherine Mansfield, Vol. 4*, ed. by Vincent O’Sullivan and Margaret Scott (Oxford: Clarendon Press, 1996), p. 253.
- 5) Katherine Mansfield, *The Collected Letters of Katherine Mansfield Vol. 5*, ed. by Vincent O’Sullivan and Margaret Scott (Oxford: Oxford University Press, 2008), p. 101.
- 6) 『地球の歩き方 — ニュージーランド2008~2009年度版』(株式会社ダイヤモンド・ビッグ社, 2007年), p. 116.
- 7) Julie Kennedy, p.1.

参考文献

- C.A. Hankin, *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories* (New York: St. Martin’s Press, 1983), pp. 214-216.
 富塚博之「『船の旅』に見られる暗闇と光の意味」(南半球評論21, 2005).
 吉野啓子『キャサリン・マンスフィールド作品の醍醐味』(朝日出版社, 2009).